



救急科
松本学医長

血管内にカテーテルという細い医療用の管を挿入して行う血栓回収療法。カテーテルの中に「ステント型」という筒状の網を入れ、血栓を捉えて取り除くことによって血管の詰まりを解消

医療最前線

救急現場 24時

県立中央病院から

(157)

70代の男性がグラウンドゴルフのプレー中に突然倒れ、救急搬送された。重度の右半身まひと言語障害。脳の太い血管が詰まり、脳梗塞を起こしていることが判明した。脳梗塞はいかに短時間で脳内の血流を再開させられるかが勝負だ。緊急で行った治療が「機械的血栓回収療法」。足の付け根から血管内にカテーテルと「ステント型リトリバー」を通し、脳に到達させて血栓を摘出した。開始から31分で脳の血流が再開。男性は入院中のリハビリを経て、社会復帰を果たした。

する、画期的な血管内治療だ。

救急科の松本学医長によ

ると、国内で「ステント型リトリバー」が使用できるようになったのは201

組織の障害が進行していない③脳の主幹動脈(太い血管)に病変が存在している

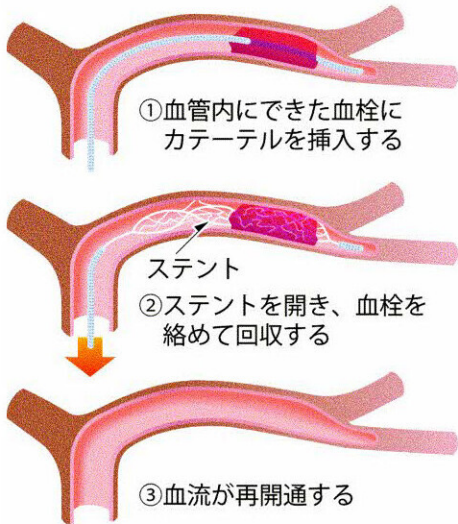
4年。県立中央病院では15年、国際的な研究で有効性が認められたのを確認し、導入した。ステント型リトリバーを使う「機械的血栓回収療法」の対象は、①脳梗塞発症から6時間以内②脳

脳梗塞などで一度壊死した脳細胞は元に戻すことはできず、一命を取り留めてもまひなどの深刻な後遺症をもたらすケースは多い。治療が1時間遅れるごとにその確率が高くなるとされている。

同病院でこの治療ができる医師は3人。「最短时间内で行うために、助手を合わせて3人以上で執刀するのが理想」と松本学医長は言う。

緊急時にすぐに対応できるよう、執刀医のトレーニング、育成を行っていて、「熱意ある若い医師に積極的に治療に協力してもらい、医師らの技術をフルに発揮したい」としている。

脳梗塞に血栓回収療法 まひと言語障害 6時間内



ーなどの条件を満たした患者。こうした患者は、この治療により高い確率で自立生活が送れるようになった。

17年以降、適用例が増えており、同病院ではこれまで34人を治療。広範囲にわたる血流の再開率は66%に上り、治療を受けた患者の半数以上が社会復帰している。

◇ 県立中央病院では、患者

の命を救うために、医師らが24時間、時間との闘いの中で、最善の医療を提供している。その現場を、シリーズで伝える。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します